

最高裁において昭和四〇年代に確定した  
死刑判決の動向

永田憲史

目次

一、はじめに

二、概況

三、死刑選択基準の定立に向けた道程

四、死刑を相当とする罪責の量の変遷

五、個別の量刑因子に対する評価及びその変化

## 一、はじめに

最高裁は、昭和五八年の永山事件第一次上告審判決において、死刑選択の一般的な基準について初めて判示した<sup>(1)</sup>。すなわち、「死刑制度を存置する現行法制の下では、犯行の罪質、動機、態様ことに殺害の手段方法の執拗性・残虐性、結果の重大性ことに殺害された被害者の数、遺族の被害感情、社会的影響、犯人の年齢、前科、犯行後の情状等各般の情状を併せ考察したとき、その罪責が誠に重大であつて、罪刑の均衡の見地からも一般予防の見地からも極刑がやむをえないと認められる場合には、死刑の選択も許されるものといわなければならない」と判示したのである。

永山事件第一次上告審判決以降に最高裁で確定した死刑判決、さらには死刑選択基準に関する判例違反を主張し、死刑を求めて検察官によりなされた上告事件の判断を総覧すると、死刑選択基準は以下のように分析できる。<sup>(2)</sup>

まず、永山事件第一次上告審判決以降には、検察官による死刑の求刑がない事案で死刑判決が下された例がないことから、死刑の求刑は死刑選択の大前提であると考えられる。また、同様に、永山事件第一次上告審判決以降には、殺害の故意を伴う犯罪による被害者の死亡が存在しない事例で死刑判決が下されたこともないから、殺害の故意を伴う犯罪による被害者の死亡も死刑選択の大前提と言えよう。

次に、被殺者数は一貫して極めて重要な因子であり、複数、特に三名以上になると格段に死刑となりやすい傾向にあると言える。しかし、三名以上殺害の事例でも、審級間で結論が割れた事案もある一方、被殺者が一名の事例でも、永山事件第一次上告審判決以降、これまでに最高裁は二〇件で死刑としており、被殺者数が絶対的基準とはなっていない。従つて、被殺者数で一定のふり分けをした後、以下の因子の存否及び程度を考慮する必要がある。

第一に、影響度が重大な因子として、以下のものが考えられる。

まず、重要と考えられるのは、犯行の罪質及び目的である。特に身代金目的であると、被殺者が一名であっても、死刑の傾向が極めて強い。また、保険金目的の場合も同様である。これらを除く利欲目的などその他の目的の場合には、被殺者が二名以上の場合であつて、以下に検討するような他の加重因子があるときに、死刑とする傾向が窺われる。

また、殺害を伴う前科があり、今犯でも殺害した場合、極めて死刑になりやすい。一名の故意の殺害を伴う犯罪で無期懲役に処されて服役し、仮出獄又は仮釈放後に再び一名の故意の殺害を伴う犯罪を行なった場合（被殺者通算二名事例）、今犯の被殺者が一名でも、近時の判例は死刑とする慣行を半ば確立したと言つてよい。これは、被殺者通算二名事例の場合、犯罪傾向の深化が窺われやすいためであろう。

同様に、犯罪傾向が窺われるという観点から、複数の被害者を異なる機会に殺害した事例は、複数の被害者を同一の機会に殺害した事例に比べて死刑になりやすい。これは、服役こそしていないものの、規範の壁を再度乗り越える点で犯罪傾向が強く看取されるためであると考えられる。これに対し、被殺者二名の事例のうち同一の機会に二名を殺害して死刑とされた事例には、罪責を相当高める何らかの事情が見受けられることが極めて多い。逆に言えば、同一の機会に二名を殺害した事例で罪責を相当高めるような事情がない場合、死刑は回避されやすい。

さらに、永山事件第一次上告審判決が摘示しなかった因子であるものの、近時、共犯事例において、主導性がある場合には、極めて死刑になりやすい傾向にある。また、そこまでいかなくとも、共犯者と対等の場合や重要な役割を担っていると評価される場合も死刑となりやすい。逆に、共犯者に対して従属的立場にある場合、死刑はほぼ回避されると言つてよい。



同じく、永山事件第一次上告審判決が摘示しなかった因子であるが、計画性も重要な因子である。特に身代金目的の事案で、殺害してから身代金名目で金銭を要求することを計画していた場合、死刑の可能性が極めて強い。また、それ以外の目的であっても、殺害の計画性が高い場合や用意が周到に準備されている場合は、死刑となりやすい。もともと、被殺者通算二名の事案では、殺害の計画性がなくとも、死刑に十分なりうる。同種犯罪や同種態様ならば、犯罪傾向の深化が窺われやすいため、なおさらである。逆に、被殺者が二名又は一名の事案で、重大な前科がなく、計画性がない場合には、死刑が回避されることも多い。

また、性的目的以外の犯行の場合、特に利欲目的の場合に性的な被害が随伴したとき、死刑になりやすい傾向が窺われる。

第二に、影響度がこれまで挙げた因子ほど大きくないものの、一定程度の影響を与える因子として、動機の形成原因、殺害方法の執拗性又は残虐性、遺族の被害感情、社会的影響、少年であることなどがある。

反省悔悟、生育歴、従前の社会生活の状況、それらから推測される改善可能性などを含むいわゆる主観的事情についても影響度はそれほど大きくない。実際には、殺害の計画性がないなどの罪体関係が死刑回避に決定的な影響をもたらしていることが圧倒的に多い。

検察官の死刑の求刑と行為者による故意の殺害を大前提に、被殺者数により一定の振るい分けがなされた後、犯行の罪質及び目的、殺害を伴う前科、殺害の一回性、共犯における主導性、殺害の計画性、性被害といった影響度が重大な因子の存否及び程度により、ほぼ死刑選択の可否が判断され、その他の一定程度影響を与える因子の存否及び程度により、若干の修正又は補完がなされていると言える。裁判所は、おおむね、被殺者数、影響度が重大な因子の大部分を

占める罪体に関係する事情を中心に判断していると言え、主観的事情が死刑選択に大きな影響を与えることは少ない。そして、最高裁が、「著しく正義に反する」(著反正義)として、刑訴法四一一一条二号により破棄した事案は、光市事件を除けば刑の質的な差に対応する情状の質的な差があり、死刑選択基準から極めて明白に逸脱したもので、類似の事案とのバランスを著しく欠くものであると言える。

永山事件第一次上告審判決以降の裁判所、とりわけ最高裁の死刑選択基準は、光市事件のようなごく一部の例外を除けば、安定的であり、厳罰化の傾向も寛刑化の傾向も見受けられない。永山事件第一次上告審判決は、考慮すべき因子や一般的な基準を示しただけでなく、その後の死刑事件の判断に肉付けされることにより、あるいは、その後の死刑事件の判断と一体化することにより、具体的実質的な死刑選択基準の判例となったと考えるべきである。<sup>(4)</sup> この基準は、裁判員裁判においても妥当すると考えられる。<sup>(5)</sup>

それでは、この基準が作り上げられる以前の死刑選択の動向はいかなるものであったのだろうか。本稿では、最高裁において昭和四〇年代(一九六五年乃至一九七四年)に確定した死刑判決を総覧し、死刑選択の傾向を把握するとともに、永山事件第一次上告審判決において判示された基準の生成に至る裁判所の判断の変遷を探ることとしたい。

なお、本稿においては、先に掲載した死刑判決一覧資料記載の凡例に則り、【】の整理番号を付した。

- (1) 最判昭五八年七月八日刑集三七卷六号六〇九頁。
- (2) 詳しくは、拙著『死刑選択基準の研究』(関西大学出版部、二〇一〇)参照。
- (3) 最判平一八年六月二〇日判時一九四一号三八頁、最判平二四年二月二〇日裁判所時報一五五〇号二六頁。
- (4) 拙著・前掲注(2)一一二―一一七頁。
- (5) 拙稿「裁判員裁判における死刑選択基準」福井厚編著『死刑と向きあう裁判員のために』(現代人文社、二〇一一)三七

頁以下、五二―五三頁。

(6) 拙稿「最高裁において昭和四〇年代に確定した死刑判決一覽」関西大学法学論集六二卷三号(二〇一二)二八頁以下。

## 二、概 況

### 1. 件 数

昭和四〇年代(一九六五年乃至一九七四年)、最高裁において、計六六件の死刑判決が確定した。また、昭和四〇年代末に最高裁において判決がなされ、判決訂正の申立て(刑事訴訟法四一五条)がなされて、昭和五〇年代に入ってから同申立てが棄却され、判決が確定したものが一件ある。<sup>(7)</sup>それゆえ、最高裁において昭和四〇年代に判決がなされ、その後死刑が確定した事件は六七件を数える。最高裁判決が確定したのは、昭和五〇年代であるものの、判決日が昭和四〇年代であるため、以下では、この一件も含めて六七件を検討対象とすることとする。

なお、今日では、高裁の死刑の判断を不服としてなされた上告に対し、最高裁が上告を棄却した場合、弁護人から判決訂正の申立てがなされるのが通例となっている。しかし、昭和四〇年代には判決訂正の申立てがなされることは大変珍しく、判決訂正の申立てがなされたのは、先の一件のほかには一件しかない。<sup>(8)</sup>

### 2. 被殺者数別の状況

六七件を被殺者数別に見ると、その内訳は、被殺者六名の事案が一件、<sup>(9)</sup>被殺者五名の事案が一件、<sup>(10)</sup>被殺者四名の事案が一件、<sup>(11)</sup>被殺者三名の事案が四件、<sup>(12)</sup>被殺者二名の事案が一七件、<sup>(13)</sup>被殺者一名の事案が四三件となっている。<sup>(14)</sup>

最高裁において昭和四〇年代に確定した死刑判決の動向

このように、被殺者数別に見ると、被殺者一名の事案が全体の約三分の二を占めており、被殺者二名の事案と被殺者一名の事案を合わせると全体の約九割に及んでいる。このように、被殺者二名の事案と被殺者一名の事案が大半を占め、とりわけ被殺者一名の事案が多く見受けられる理由としては、後述のように、死刑を相当とする罪責の量が永山事件第一次上告審判決以降に比べて小さく、結果として被殺者一名の事件でも死刑になりやすかったことが挙げられる。

### 3. 判決年別の状況

次に、最高裁の判決年別に見ると、その内訳は、昭和四〇年（一九六五年）の事案が六件<sup>(15)</sup>、昭和四一年（一九六六年）の事案が八件<sup>(16)</sup>、昭和四二年（一九六七年）の事案が一〇件<sup>(17)</sup>、昭和四三年（一九六八年）の事案が八件<sup>(18)</sup>、昭和四四年（一九六九年）の事案が八件<sup>(19)</sup>、昭和四五年（一九七〇年）の事案が一件<sup>(20)</sup>、昭和四六年（一九七一年）の事案が六件<sup>(21)</sup>、昭和四七年（一九七二年）の事案が六件<sup>(22)</sup>、昭和四八年（一九七三年）の事案が三件<sup>(23)</sup>、昭和四九年（一九七四年）の事案が一件となっている<sup>(24)</sup>。

このように、判決年別に見ると、昭和四八年以降、最高裁において死刑が確定する件数が少なくなっている。この理由については、後に検討することとしたい。

(7) 【1c-40s-19】 最判昭四九年二月二〇日裁判集刑一九四号四一五頁。判決訂正申立ては、昭和五〇年一月二九日に棄却され、最高裁判決が確定した。

(8) 【2c-40s-10】 最判昭四六年二月二一日裁判集刑一八二号四九九頁。

- (9) 【6-40 s-1 Li】 最判昭四一年三月三十一日裁判集刑一五八号七七頁。
- (10) 【5-40 s-1】 最判昭四七年六月一五日裁判集刑一八四号六三七頁。
- (11) 【4-40 s-1】 最判昭四一年二月一日刑資一八九号一〇頁。
- (12) 【3-40 s-1】 最判昭四一年七月一四日刑資一八九号九五頁、【3-40 s-2】 最判昭四一年二月八日刑資一八九号二七頁、【3-40 s-3】 最判昭四四年三月二五日刑資二二三号九六頁、【3-40 s-4】 最判昭四八年二月一三日裁判集刑一九〇号八六七頁。
- (13) 身代金目的及び保険金目的以外のその他の利欲目的のものとして、【2 c-40 s-1 J】 最判昭四一年二月四日刑資一八九号四三頁（【J 2-13】）、【2 c-40 s-2】 最判昭四一年五月三十一日刑資一八九号三四頁、【2 c-40 s-3】 最判昭四二年七月二五日裁判集刑一六三号一二五頁、【2 c-40 s-4】 最判昭四二年九月二九日刑資一八九号二二〇頁、【2 c-40 s-5】 最判昭四三年五月二日裁判集刑一六七号一五一頁、【2 c-40 s-6】 最判昭四四年二月二三日裁判集刑一七四号七五一頁、【2 c-40 s-7】 最判昭四五年六月二一日刑資二二三号二七六頁、【2 c-40 s-8】 最判昭四五年二月一二日裁判集刑一七四号五九三頁、【2 c-40 s-9】 最判昭四六年一〇月二六日裁判集刑一八一号八六一頁、【2 c-40 s-10】 最判昭四六年二月二一日、【2 c-40 s-11】 最判昭四七年四月二〇日裁判集刑一八四号一五七頁。性的目的のものとして、【2 d-40 s-1】 最判昭四五年二月一五五五頁、【2 e-40 s-2】 最判昭四三年五月二日裁判集刑一六七号一三一頁、【2 e-40 s-3】 最判昭四五年二月一九日刑資二二三号三一五頁、【2 e-40 s-4】 最判昭四七年二月八日裁判集刑一八五号五七一頁。その他のものとして、【2 x-40 s-1】 最判昭四五年九月二二日刑資二二三号一六七頁。
- (14) 身代金目的のものとして、【1 a-40 s-1】 最判昭四二年五月二五日裁判集刑一六三号三八三頁、【1 a-40 s-2】 最判昭四二年一〇月一三日裁判集刑一六四号七七七頁、【1 a-40 s-3】 最判昭四三年七月二日裁判集刑一六八号一頁、【1 a-40 s-4】 最判昭四六年五月二〇日裁判集刑一八〇号三三一頁。保険金目的のものとして、【1 b-40 s-1】 最判昭四〇年二月二一日刑資一九三号六四四頁、【1 b-40 s-2】 最判昭四四年一月六日刑資二二三号一一九頁。身代金目的及び保険金目的以外のその他の利欲目的として、【1 c-40 s-1】 最判昭四〇年六月二九日裁判集刑一五六号八七頁、【1 c-40 s-2】 最判昭四一年五月三十一日裁判集刑一五九号九五九頁、【1 c-40 s-3】 最判昭四二年三月二四日裁判集刑一六二号

最高裁において昭和四〇年代に確定した死刑判決の動向

一〇八五頁、【1c-40s-4】 最判昭四二年四月七日刑資一八九号二〇五頁、【1c-40s-5】 最判昭四二年七月一四日裁判集刑一六三三九三頁、【1c-40s-6】 最判昭四三年四月二六日刑資一八九号四二二頁、【1c-40s-7】 最判昭四三年五月二日刑資一八九号四四七頁、【1c-40s-8】 最判昭四三年二月一三日刑資一八九号四六七頁、【1c-40s-9】 最判昭四四年四月二五日裁判集刑一七一六八五頁、【1c-40s-10】 最判昭四四年七月一日刑資二二三三三六頁、【1c-40s-11】 最判昭四四年二月一六日裁判集刑一七四号六八一頁、【1c-40s-12】 最判昭四五年四月一六日刑資二三号二九二頁、【1c-40s-13】 最判昭四五年一月二二日裁判集刑一七八号二四九頁、【1c-40s-14】 最判昭四六年二月二三日裁判集刑一七九号九七頁、【1c-40s-15】 最判昭四六年三月九日刑資二二三三三九四頁、【1c-40s-16Li】 最判昭四七年二月二二日裁判集刑一八三三二六九頁、【1c-40s-17】 最判昭四八年三月二二日裁判集刑一八六号二〇五頁、【1c-40s-18】 最判昭四八年九月二七日裁判集刑一九〇号四〇一頁、【1c-40s-19】 最判昭四九年二月二〇日裁判集刑一九四号四一五頁。性的目的のものとして、【1d-40s-1】 最判昭四〇年二月一七日刑資一九三三六〇三頁、【1d-40s-2】 最判昭四一年四月八日裁判集刑一五九号一三五頁、【1d-40s-3】 最判昭四二年五月二五日刑資一八九号三七二頁、【1d-40s-4】 最判昭四二年九月二二日刑資一八九号三五七頁、【1d-40s-5】 最判昭四四年二月五日裁判集刑一七四号二〇三頁、【1d-40s-6】 最判昭四五年二月二〇日裁判集刑一七五号一〇三頁、【1d-40s-7J】 最判昭四七年六月二七日裁判集刑一八四号七八五頁(【J1-8】)、【1d-40s-8】 最判昭四七年七月一八日刑資二二六号七二頁。愛憎ほかのものとして、【1e-40s-1】 最判昭四〇年一月二二日刑資一九三三五九二頁、【1e-40s-2】 最判昭四〇年七月二〇日裁判集刑一五六号二二七頁、【1e-40s-3】 最判昭四〇年九月一七日刑資一九三三五六七頁、【1e-40s-4】 最判昭四三年七月一六日刑資一八九号四三三頁、【1e-40s-5】 最判昭四五年三月二六日裁判集刑一七五号五一頁、【1e-40s-6】 最判昭四六年四月二二日刑集二五卷三三三三〇頁。拳銃奪取目的のものとして、【1f-40s-1J】 最判昭四四年一〇月二二日裁判集刑一七三三三三頁、【1f-40s-2】 最判昭四五年三月二六日刑資二二三三三〇頁。その他のものとして、【1x-40s-1】 最判昭四三年四月二二日刑資一八九号四七七頁、【1x-40s-2J】 最判昭四五年八月二〇日刑資二二三三三八八頁(【J1-7X】)。

(15) 【1e-40s-1】 最判昭四〇年一月二二日、【1c-40s-1】 最判昭四〇年六月二九日、【1e-40s-2】 最判昭四〇年七月二〇日、【1e-40s-3】 最判昭四〇年九月一七日、【1d-40s-1】 最判昭四〇年十二月一七日、【1b-40s-1】



最判昭四〇年二月二一日。

- (16) 【2c-40s-1J】 最判昭四一年二月四日、【6-40s-1Li】 最判昭四一年三月三一日、【1d-40s-2】 最判昭四一年四月八日、【2c-40s-2】 最判昭四一年五月三一日、【1c-40s-2】 最判昭四一年五月三一日、【3-40s-1】 最判昭四一年七月二四日、【4-40s-1】 最判昭四一年二月二一日、【3-40s-2】 最判昭四一年二月八日。

- (17) 【2e-40s-1】 最判昭四二年三月一六日、【1c-40s-3】 最判昭四二年三月二四日、【1c-40s-4】 最判昭四二年四月七日、【1a-40s-1】 最判昭四二年五月二五日、【1d-40s-3】 最判昭四二年五月二五日、【1c-40s-5】 最判昭四二年七月一四日、【2c-40s-3】 最判昭四二年七月二五日、【1d-40s-4】 最判昭四二年九月二二日、【2c-40s-4】 最判昭四二年九月二九日、【1a-40s-2】 最判昭四二年一〇月一三日。

- (18) 【1x-40s-1】 最判昭四三年四月二二日、【1c-40s-6】 最判昭四三年四月二六日、【2c-40s-5】 最判昭四三年五月二日、【2e-40s-2】 最判昭四三年五月二日、【1c-40s-7】 最判昭四三年五月二日、【1a-40s-3】 最判昭四三年七月二日、【1e-40s-4】 最判昭四三年七月一六日、【1c-40s-8】 最判昭四三年十二月一三日。

- (19) 【3-40s-3】 最判昭四四年三月二五日、【1c-40s-9】 最判昭四四年四月二五日、【1c-40s-10】 最判昭四四年七月一一日、【1f-40s-1J】 最判昭四四年一〇月二二日、【1b-40s-2】 最判昭四四年十一月六日、【1d-40s-5】 最判昭四四年十二月五日、【1c-40s-11】 最判昭四四年十二月一六日、【2c-40s-6】 最判昭四四年十二月二三日。

- (20) 【2e-40s-3】 最判昭四五年二月一九日、【1d-40s-6】 最判昭四五年二月二〇日、【1e-40s-5】 最判昭四五年三月二六日、【1f-40s-2】 最判昭四五年三月二六日、【1c-40s-12】 最判昭四五年四月一六日、【2c-40s-7】 最判昭四五年六月一一日、【1x-40s-2J】 最判昭四五年八月二〇日、【2x-40s-1】 最判昭四五年九月二二日、【1c-40s-13】 最判昭四五年十一月二二日、【2c-40s-8】 最判昭四五年十二月二二日、【2d-40s-1】 最判昭四五年十二月一五日。

- (21) 【1c-40s-14】 最判昭四六年二月二三日、【1c-40s-15】 最判昭四六年三月九日、【1e-40s-6】 最判昭四六年四月二二日、【1a-40s-4】 最判昭四六年五月二〇日、【2c-40s-9】 最判昭四六年一〇月二六日、【2c-40s-10】 最判昭四六年十二月二一日。

- (22) 【1c-40s-16Li】 最判昭四七年二月二二日、【2c-40s-11】 最判昭四七年四月二〇日、【5-40s-1】 最判昭四七

最高裁において昭和四〇年代に確定した死刑判決の動向

年六月一五日、【1 d-40 s-7 J】 最判昭四七年六月二七日、【1 d-40 s-8】 最判昭四七年七月一八日、【2 e-40 s-4】  
最判昭四七年二月八日。

(23) 【1 c-40 s-17】 最判昭四八年三月二日、【1 c-40 s-18】 最判昭四八年九月二七日、【3-40 s-4】 最判昭四八年二月一三日。

(24) 【1 c-40 s-19】 最判昭四九年二月二〇日。

### 三、死刑選択基準の定立に向けた道程

#### 1. 死刑選択基準の提示

永山事件第一次上告審判決において死刑選択基準が定立されるまでは、何らかの基準や判断要素を示すことなく、死刑選択という結論を導く判決が一般的であった。そうした中、一部の事件の判決においてのみ、死刑選択基準や判断要素が提示されていた。そこで、永山事件第一次上告審判決において死刑選択基準が定立されるまでに示されていた死刑選択基準を分析することで、永山事件第一次上告審判決における死刑選択基準がどのようになされてきたのかを考察することとしたい。

昭和四〇年代前半には、罪体よりも主観的事情を先に挙げる判決が見受けられる。

例えば、「およそ死刑が、国家権力によるとはいえ、何物にも代え難い人間の生命を剥奪するものである性質に鑑み、その適用については慎重の上にも慎重を期し、能うる限りこれを差控えるべきものとの考えに立つたうえ、被告人の贖罪の道になお残されたものなきかにつき、逐一検討してみたのであるが、……被告人の生活歴、環境、性格、素行、本件犯行の動機、態様、結果、犯行後の状況、被害者の遺族の心情、社会的影響、被告人の前科、前歴等に照



らすときは……」とした判決がある。<sup>(25)</sup> この事件の控訴審判決も、「被告人の生活、素行、経歴、本件……犯行の動機、態様、犯行後の状況、被害者および遺族の心情並びに本件の与えた社会的影響等に照らすと……」と第一審判決とよく似た基準を示している。<sup>(26)</sup>

これらの判決は、罪体よりも主観的事情を先に摘示することにより、主観的事情を重視しようとしたと解される。もともと、このように、罪体よりも主観的事情を先に摘示する判決は少数派であり、永山事件第一次上告審判決同様、罪体を主観的事情よりも先に摘示する判決が昭和四〇年代を通じて多数派であった。

例えば、「犯行の動機、原因、手段、態様、被害結果等を十分考慮に入れるべきことは勿論、犯人の性格、年令、境遇及び生活態度並びに犯行に至るまでの経緯及び犯行後の状況、更には犯行の社会に及ぼした影響の如何等について、真に極刑に値するか否かを慎重に検討、考慮する必要があることは当然といわなければならない」とする判決<sup>(27)</sup>、「本件犯行の動機、罪質、態様、犯行後の状況、被害者側の被害感情並びに被告人の年令、性行、生立、境遇、経歴、その他諸般の情状を総合して考察する」とする判決<sup>(28)</sup>、「本件犯行の動機、罪質、態様、結果の重大性、被害者およびその遺族に与えた精神的、物質的打撃、社会一般に及ぼした衝撃、その他被告人……の年令、性格、経歴、家庭環境、犯行後の状況、被告人……の前科等記録によって認められる諸般の情状をあわせ考察すると、……」とする判決など<sup>(29)</sup>がある。

このように、罪体を主観的事情よりも先に摘示するのは、後述のように、死刑選択の判断に当たって、罪体を重視していたためであると考えられる。

最高裁が死刑選択基準や判断要素を提示するのは、昭和四〇年代末になってからのことである。

「本件犯行の動機、兇器準備などの計画性、被害者が当時五〇年と二一年の無抵抗の婦女子二名であること、殺害の手段方法の残虐性、犯行後の行状、前科前歴、犯行時の年令など原判示の諸般の情状を総合して考察すれば、被告人の生活歴、家庭の事情、性格など被告人に有利な情状をすべて参酌しても……」とする判決と、<sup>(30)</sup>「犯行の動機、計画性、犯行の態様、犯行後の行状、被害者遺族に与えた打撃、犯行の社会的影響の重大性、被告人の前科歴などを考えると……」とする判決が<sup>(31)</sup>見受けられる。

このように、最高裁も、主観的事情より罪体を先に挙げてゐる。そして、罪体を先に摘示する方法は永山事件第一次上告審判決においても踏襲されることとなった。また、最高裁は、いずれの判決においても計画性を摘示しており、後述のように、犯行の計画性が死刑選択の判断に当たって重要であつたことの証左と言えよう。

もっとも、昭和四〇年代において最高裁で死刑が確定した事件の判決の中には、永山事件第一次上告審判決において定立された死刑選択基準と同じ言い回しをするものは見受けられない。

しかし、罪体を主観的事情よりも先に摘示する方法は既にこの時期に主流となっており、こうした方法が永山事件第一次上告審判決に引き継がれたと考えられる。とは言え、犯行の計画性のような重要な因子が永山事件第一次上告審判決で摘示されなかつたことや、昭和四〇年代に最高裁で死刑が確定した事件の中に罪刑の均衡や一般予防といった量刑原理に言及する判決がないことに鑑みると、昭和四〇年代の判決の言い回しが永山事件第一次上告審判決に直接影響を与えたとは考え難い。

そのため、① 最高裁は永山事件第一次上告審判決において昭和五〇年代に入つてからの判決の言い回しを用いたか、② 永山事件自体から量刑因子を取り出し、量刑原理を構成して死刑選択基準を定立したと思われる。このよう

な可能性については、永山事件第一次上告審判決より前の昭和五〇年代に最高裁で死刑が確定した事件を検討することで検証することとしたい。

## 2. 最高裁の判決様式

昭和三〇年（一九五五年）の三鷹事件上告審判決を契機に、<sup>(32)</sup>その後の死刑事件においては、慎重な審理を行なうために、最高裁でも弁論を行なうことが慣行となった。<sup>(33)</sup>そして、上告趣意が実質的に量刑不当の主張のみであると考えられる場合であっても、決定ではなく判決の形式が採られるようになった。<sup>(34)</sup>

判決の形式が採られてからしばらくの間は、判決文中で事案の内容が紹介されることはほとんどなく、刑法四一条が適用される事案でないことまで敢えて言及されることは少なかった。

その後、事案の内容の紹介はなされないものの、「原判決が、被告人に死刑を科した第一審判決を維持したのは、本件犯罪の情状に照らしてまことにやむをえないと認められる」などのように、<sup>(35)</sup>原判決を是認することを言及することが多くなった。とは言え、<sup>(36)</sup>原判決を是認することを言及しない判決も散見できる一方で、事案の内容を比較的詳しく紹介する判決もあるなど、<sup>(37)</sup>最高裁の判決様式は確固たるものではなかった。また、この時期には、かかる言い回しは統一されていなかった。<sup>(38)</sup>さらに、平文で記述するか、括弧書きで記述するかについて、<sup>(39)</sup>同じ小法廷においても、統一されていなかった。

昭和四七年（一九七二年）末以降、括弧書きで事案を紹介するようになった。<sup>(40)</sup>もともと、依然として、原判決を是認することを言及しない判決も散見できた。<sup>(41)</sup>

平文で、「なお、記録によれば」として事案を比較的詳しく紹介するようになったのは、昭和五六年（一九八一年）以降のことであり、<sup>(42)</sup> 昭和五八年の（一九八三年）永山事件第一次上告審判決の直前であった。

- (25) 京都地判昭四三年二月二日刑資二一六号一頁（1c-40s-16Li） 最判昭四七年二月二日の第一審。
- (26) 大阪高判昭四四年二月二三日刑資二一六号一八頁（1c-40s-16Li） 最判昭四七年二月二日の控訴審。
- (27) 東京高判昭四四年一月二九日高裁時報二〇卷一号一二頁（2x-40s-1） 最判昭四五年九月二二日の控訴審。
- (28) 東京高判昭四四年五月一三日刑資二一三号一七四頁（1x-40s-2J） 最判昭四五年八月二〇日の控訴審。
- (29) 広島高判昭四七年三月一日刑資二一六号一九五頁（1c-40s-18） 最判昭四八年九月二七日の控訴審。
- (30) 【2e-40s-4】 最判昭四七年二月八日。
- (31) 【1c-40s-19】 最判昭四九年二月二〇日。
- (32) 最大判昭三〇年六月二二日刑集九卷八号一一八九頁。
- (33) 真野毅「最高裁の一年——判決の思い出」同編著『裁判と現代』（日本評論社、一九六四）一頁以下、二三—二四頁。
- (34) 原田國男「上告審の量刑審査と量刑破棄事例の研究（上）」判時一七六五号三頁以下、七頁〔『量刑判断の実際（第三版）』（立花書房、二〇〇八）所収、二六四頁以下、二七四頁〕。
- (35) 【2c-40s-11】 最判昭四七年四月二〇日。
- (36) 【1e-40s-5】 最判昭四五年三月二六日、【1c-40s-13】 最判昭四五年十一月二日、【1e-40s-6】 最判昭四六年四月二二日など。いずれも第一小法廷の判決である。
- (37) 最判昭三九年二月二五日、【1c-40s-7】 最判昭四三年五月二日、【1d-40s-5】 最判昭四四年二月五日など。
- (38) 平文で記述したものととして、【1e-40s-1】 最判昭四〇年一月二二日、【1c-40s-6】 最判昭四三年四月二六日、【1e-40s-4】 最判昭四三年七月一六日、【1c-40s-14】 最判昭四六年二月二三日、【2c-40s-10】 最判昭四六年二月二二日、【2c-40s-11】 最判昭四七年四月二〇日など。括弧書きで記述したものととして、【2c-40s-8】 最判昭四四年二月二二日、【1c-40s-11】 最判昭四四年二月一六日、【1d-40s-6】 最判昭四五年二月二〇日、【2d-40s-1】 最判昭四五年二月一五日、【2c-40s-9】 最判昭四六年一〇月二六日、【1c-40s-16Li】 最判昭四七年二

月二二日など。

- (39) 例えば、第三小法廷では、【2 c - 40 s - 9】 最判昭四六年一〇月二六日及び【1 c - 40 s - 16 L i】 最判昭四七年二月二二日は括弧書きで記述されていたが、その間になされた【2 c - 40 s - 10】 最判昭四六年一二月二二日は、平文で記述されていた。

- (40) 【2 e - 40 s - 4】 最判昭四七年一二月八日以降である。

- (41) 最判昭五三年六月二二日裁判集刑二一〇号三〇一頁。

- (42) 最判昭五六年六月二六日裁判集刑二二三号六六三頁。

#### 四、死刑を相当とする罪責の量の変遷

##### 1. 時期区分

それでは、昭和四〇年代には、どのような事案で死刑が選択されているのであろうか。

永山事件第一次上告審判決以降と同様、昭和四〇年代においても、検察官による死刑の求刑は死刑選択の大前提である。また、殺害の故意を伴う犯罪による被害者の死亡が存在しない事例で死刑判決が最高裁において確定したこともないから、殺害の故意を伴う犯罪による被害者の死亡も死刑選択の大前提であることに変わりはない。

次に、被殺者数は、昭和四〇年代においても極めて重要な因子であり、特に三名以上になると格段に死刑となりやすい傾向にあると言える。

しかし、永山事件第一次上告審判決以降、被殺者二名又は一名の事案では、その罪責を相当押し上げる因子がある場合に死刑が選択されているのに対して、昭和四〇年代には、そのような罪責を押し上げる因子が見当たらなかった

最高裁において昭和四〇年代に確定した死刑判決の動向

り、罪責を押し上げる因子があってもその押し上げる程度が小さかったりする事案が少なからず存在する。

これらの事案を最高裁における判決年に着目しつつ分類すると、昭和四〇年代を三つの時期に区分することができ  
る。

第一期は、昭和四〇年である。この時期には、被殺者一名の事案で、罪責を押し上げる因子が他にないか、あっても罪責を押し上げる程度が小さい場合に対してまで、死刑が選択されている<sup>(43)</sup>。この時期は、昭和四〇年代においても他の時期に比べて死刑を相当とする罪責が格段に低く、昭和四〇年代において死刑が最も選択されやすかった時期である。昭和三〇年代の厳罰化傾向が継続していたためであると推測されるが、この点については、昭和三〇年代の死刑判決を検討した上で、結論を導く必要がある。

第二期は、昭和四一年以降、昭和四七年までの時期である。この時期には、被殺者二名の事案で、罪責を押し上げる因子が他にないか、あっても罪責を押し上げる程度が小さい場合に対してまで、死刑が選択されている<sup>(44)</sup>。第一期と比較すれば、死刑を相当とする罪責としてより大きなものが求められるようになったものの、依然として死刑が選択されやすかった時期である。

被殺者二名の事案一七件は全て、また、被殺者一名の事案四三件のうち四〇件が昭和四七年以前に最高裁において判決がなされている。このことは、第一期及び第二期には、第三期に比べて、死刑を相当とする罪責が小さいものでよいとされ、死刑が選択されやすかったことを窺わせる。

第三期は、昭和四八年以降、昭和四九年までの時期である。被殺者二名又は一名の事案では、その罪責を相当押し上げる因子がある場合に死刑が選択されている<sup>(45)</sup>。具体的には、綿密な準備を行なうなどの計画性があり、共犯におい

て主導性があつた事案<sup>(46)</sup>、相当周到な準備がなされた計画性のあつた事案がある<sup>(47)</sup>。また、強盗についてののみ計画性があるにすぎないものの、共犯において主導性があつた事案は、永山事件第一次上告審判決以降の事案ほどではないとしても、その罪責を相応に押し上げたことが窺われ、第一期及び第二期に比べれば、その罪責は大きい。

## 2. 昭和四八年以降の変化の原因

第三期は、先に述べたとおり、最高裁において死刑の確定数が減少した時期と一致する。それでは、なぜ、最高裁において昭和四八年以降に死刑の確定数が減少したのであるうか。

まず考えられるのは、殺人や強盗殺人などの凶悪事犯の認知件数の減少により、従前と同様の基準で死刑を選択していたとしても、死刑となりうる事件が減少した可能性である。そこで、殺人の認知件数を見ると、昭和四〇年から昭和四九年まで、順に、二二八八件、二一九八件、二二一一件、二一九五件、二〇九八件、一九八六件、一九四一件、二〇六〇件、二〇四八件、一九一二件であつた<sup>(49)</sup>。強盗殺人の件数は統計上単独で計上されていないため、強盗致死の認知件数を見ると、昭和四〇年から昭和四九年まで、順に、一〇二件、一四一件、九八件、八六件、七二件、四二件、四八件、四九件、四二件、四九件であつた<sup>(50)</sup>。このように、認知件数を見る限り、殺人については、大きな変化はない。一方、強盗致死については、昭和四〇年代前半に比べて、昭和四〇年代後半には減少傾向が目立つ。とは言え、殺人に比べて強盗致死の件数は少なく、死刑選択に大きな影響を与えたとは即断し難い。

そこで、通常第一審における死刑言渡し人員を見ると、昭和三七年から昭和四九年まで、順に、一二人（殺人三人、強盗致死九人。以下人数のみ順に記述する）、一二人（七人、五人）、一二人（三人、九人）、一六人（六人、一〇人）、



一四人(六人、八人)、六人(二人、五人)、一五人(四人、一人)、九人(三人、五人、その他一人)、九人(二人、七人)、四人(〇人、四人)、四人(三人、一人)、四人(四人、〇人)、六人(三人、三人)であった。<sup>(51)</sup>昭和四〇年代においては、死刑事件の審理期間が現在よりも一般に短く、第一審の審理及び判決に要する期間は一年程度であり、第一審の判決から一年乃至二年程度、長くとも三年程度で最高裁の判断がなされるのが通例であった。死刑言渡し人員の減少は、強盗致死に対する死刑言渡し人員の減少とほぼ軌を一にしており、強盗致死に対する死刑言渡しの大半を占めていたと考えられる強盗殺人に対する死刑言渡しの減少が通常第一審における死刑言渡しの減少をもたらし、ひいては、最高裁における死刑の確定数の減少へとつながったと考えられる。

もう一つ考えられるのは、従前とは異なり、死刑を相当とする罪責の量としてより大きなものが求められるようになったという可能性である。既に見たように、最高裁において昭和四八年以降に死刑が確定した事案は、それ以前とは異なり、殺害の高い計画性や共犯における主導性など、罪責の量を押し上げる因子が見受けられる。それゆえ、昭和四〇年代後半に死刑の基準が変化し、<sup>(52)</sup>死刑を相当とする罪責の量がそれ以前よりも押し上げられたことも、最高裁における死刑の確定数の減少へとつながったと考えるべきである。<sup>(53)</sup>

では、なぜ、死刑を相当とする罪責の量としてより大きなものが求められるようになったのか。

最大の理由として考えられるのは、死刑に対する世界的潮流とそれを受けてなされた改正刑法草案に代表される死刑の謙抑的な適用を求める法律家の声の高まりである。<sup>(54)</sup>

改正刑法草案の審議において、死刑の言渡しを裁判官の全員一致の場合のみに限定しようとする提案は否決されたものの、「死刑の適用は、特に慎重でなければならない」(同草案四八条三項)との規定が置かれることとなった。<sup>(55)</sup>改



正刑法草案が法制審議会の総会で採択されたのは、昭和四九年五月のことであるが、法制審議会が刑事法特別部会を組織し、同部会が改正刑法草案の基礎となるいわゆる部会草案を決定したのは昭和四六年一月であった。これは、通常第一審における死刑言渡しへの減少の時期と符合する。こうした動きが死刑選択に大きな影響を与えたことは否定できない。

以上から、最高裁において昭和四八年以降に死刑の確定数が減少したのは、強盗殺人の件数が減少するとともに、死刑を相当とする罪責の量としてより大きなものが求められるようになったためであると考えられる。

(43) 【1e-40s-1】 最判昭四〇年一月二二日、【1c-40s-1】 最判昭四〇年六月二九日、【1e-40s-3】 最判昭四〇年九月一七日。

(44) 【2e-40s-1】 最判昭四二年三月一六日、【2c-40s-5】 最判昭四三年五月二日、【2e-40s-2】 最判昭四三年五月二日、【2c-40s-9】 最判昭四六年一〇月二六日、【2c-40s-11】 最判昭四七年四月二〇日、【2x-40s-1】 最判昭四五年九月二二日。

(45) 【1c-40s-17】 最判昭四八年三月二日は相当周到な準備がなされた計画性のある事件、【1c-40s-18】 最判昭四八年九月二七日は強盗についてのみ計画性があるにすぎないものの、共犯において主導性があつた事件、【1c-40s-19】 最判昭四九年一二月二〇日は綿密な準備を行なう計画性があり、共犯において主導性があつた事件であり、被殺者二名又は一名の事案はいずれもその罪責を相応に押し上げる因子がある。なお、被殺者三名以上の事案として、【3-40s-4】 最判昭四八年一二月一三日がある。

(46) 【1c-40s-19】 最判昭四九年一二月二〇日。

(47) 【1c-40s-17】 最判昭四八年三月二日。

(48) 【1c-40s-18】 最判昭四八年九月二七日。

(49) 一覧できるものとして、法務省法務総合研究所編『平成九年版犯罪白書——日本国憲法施行五〇年の刑事政策——』（大

蔵省印刷局、一九九七) 四〇八頁。

(50) 一覽できるものとして、法務省法務総合研究所編・前掲注(49) 四〇八頁。

(51) 一覽できるものとして、法務省法務総合研究所編・前掲注(49) 二二二頁。

(52) 昭和四八年以降、特に寛刑化が進んだとする見解がある。前田俊郎「それからの死刑適用基準——死刑・無期懲役識別表再追試結果」法律のひろば三六巻五号(一九八三) 六二頁以下、六五—六六頁。しかし、昭和四八年は最高裁で寛刑化が進み始めた時期であり、当時の審理期間に鑑みれば、第一審ではその二年乃至三年前から寛刑化が進行していたと考えるべきである。

(53) 強盗殺人について同じ見解を主張するものとして、加藤松次「死刑・無期量刑選択の変化——判決の傾向」ジュリスト七九八号(一九八三) 二〇頁以下、二〇—二二頁、百瀬武雄ほか「殺人及び強盗致死事件に見る量刑の変遷と地域間較差」法務総合研究所研究部紀要三〇号(一九八七) 一頁以下、二〇頁。

(54) 高度経済成長後の経済力の伸長や七〇年安保闘争など、他の要因も考えられるものの、不確かである。

(55) 法制審議会刑事法特別部会第二小委員会第二回、第三回、第一一八回、第一一九回会議。法務省『法制審議会刑事法特別部会第二小委員会議事要録(一)』(法務省、一九六四) 一一二、四頁、同『同・(六)』(法務省、一九六九) 七〇六—七一頁。法務省『法制審議会改正刑法草案 附同説明書』(法務省、一九七四) 一三四頁、法務省刑事局編『法制審議会改正刑法草案の解説』(大蔵省印刷局、一九七五) 九五—九六頁参照。

## 五、個別の量刑因子に対する評価及びその変化

それでは、昭和四〇年代において、どのような量刑因子が重視されてきたのだろうか。

### 1. 犯行の罪質及び目的

永山事件第一次上告審判決以降と同様、重要と考えられるのは、犯行の罪質及び目的である。とりわけ罪責を大き

く押し上げると考えられるのは、身代金目的の場合と保険金目的の場合である。身代金目的の場合、被殺者が一名であつても、死刑の傾向が極めて強いのは、永山事件第一次上告審判決以降と変わりがない。<sup>(56)</sup> 保険金目的の場合も同様である。これは、身代金目的の場合、多額の金銭の獲得が目指されるとともに、犯行全体の計画性が高いことが少なくなく、誘拐や拐取の後に抵抗されるなどして殺害することが多いためであると考えられる。また、保険金目的の場合、多額の金銭の獲得が目指されるとともに、犯行全体の計画性が高いことが少なくないためであると考えられる。身代金目的や保険金目的以外のその他の利欲目的の場合、それ自体で死刑を相当とするほど罪責を押し上げることなく、他の因子の存否や程度に依存することになる。愛憎が犯行の原因である場合も同様である。

性的目的の場合、身代金目的の場合と保険金目的の場合ほどではないものの、比較的大きく罪責を押し上げているように思われる。性的目的の事案が被殺者二名の事件で一件、被殺者一名の事件で八件あり、性的目的の殺害に対して、厳しい評価がなされていたことが窺われる。

## 2. 前科及び改善可能性、矯正可能性並びに更生可能性

また、昭和四〇年代においては、永山事件第一次上告審判決以降に比べて、前科が罪責を比較的大きく押し上げる因子として扱われていたと考えられる。

永山事件第一次上告審判決以降に裁判所が死刑とする慣行を半ば確立したと言ってよい、一名の故意の殺害を伴う犯罪で無期懲役に処されて服役し、仮出獄後に再び一名の故意の殺害を伴う犯行を行なった場合（被殺者通算二名事例）はこの時期においても死刑とされている。<sup>(57)</sup> また、永山事件第一次上告審判決以降も裁判所が重視している殺害の

前科がこの時期にも重視されている。<sup>(58)</sup>

しかし、昭和四〇年代においては、それらだけではなく、窃盗などの比較的軽微な同種又は同傾向の前科前歴を裁判所が相当斟酌して判断していた点が特徴的である。<sup>(59)</sup>これは、同種又は同傾向の前科が今犯に至る犯罪傾向の深化を裏付けるものとして厳しく評価されたためと思われる。

さらに、特筆すべきは、この時期には、異種又は異傾向の前科前歴に対してまで裁判所が非常に厳しい目を向けていたことである。<sup>(60)</sup>これは、異種又は異傾向の前科を一般的な犯罪傾向の高さを示唆するものとして被告人に相当不利益に評価していたためであると考えられる。

興味深いことに、昭和四〇年代においては、改善可能性、矯正可能性及び更生可能性について言及した判決は極めて少ない。<sup>(61)</sup>とりわけ異種又は異傾向の前科に対する評価において、改善可能性や矯正可能性の判断を実質的に行うことで、改善可能性や矯正可能性を別個論じる必要がなかったためであろうと思われる。

### 3. 共犯における主導性

永山事件第一次上告審判決以降と同様、共犯事例において、主導性がある場合には、その罪責は比較的大きく押し上げられる。<sup>(62)</sup>逆に、共犯者に対して従属的立場にある場合、その罪責は押し下げられ、死刑が回避されることが多い。<sup>(63)</sup>

既に昭和四〇年代には、共犯における主導性は罪責を比較的大きく押し上げる因子であった。にもかかわらず、永山事件第一次上告審判決において、共犯における主導性について言及されなかった理由は、最高裁において永山事件第一次上告審判決以前の昭和五〇年代に確定した死刑判決を検討する中で考察することとした。

#### 4. 計画性

ここでもまた、永山事件第一次上告審判決以降と同様、殺害の計画性がある場合には、その罪責は比較的大きく押し上げられる。<sup>(64)</sup>

しかし、被殺者二名の事案一七件のうち、罪責を押し上げる因子が他にないか、あっても罪責を押し上げる程度が小さい上、殺害の計画性がなく、犯行の前提となる強盗などの計画性に留まる事件が合わせて一〇件と過半数を占めていた。<sup>(65)</sup> また、被殺者一名の事案四三件のうち、罪責を押し上げる因子が他にないか、あっても罪責を押し上げる程度が小さい上、殺害の計画性がなく、犯行の前提となる強盗などの計画性に留まる事件が合わせて一五件と約三分の一を占めていた。<sup>(66)</sup>

これらから、昭和四〇年代においては、殺害の計画性がなくとも、その犯行の前提となる強盗などの計画性でさえ、その罪責を大きく押し上げる因子と考えられていたと言える。この点は、永山事件第一次上告審判決以降の量刑因子の評価とは相当異なるところであり、昭和四〇年代、とりわけ昭和四七年までに最高裁で確定する死刑判決が多かった一因であると考えられる。

#### 5. 性被害

性被害を与えたことが被告人の罪責を大きく押し上げたと評価される事件も散見できる。<sup>(67)</sup>

性的目的がある場合に比較的大きく罪責を押し上げていることと合わせて考察すると、遅くとも昭和四〇年代には性被害を与えたことに対する評価が厳しくなっていたことが窺われる。

これまで、筆者は、死刑の判断において、性被害を与えたことに対する評価が厳しくなるのは平成に入ってからだと考えてきたが、<sup>(68)</sup>そのような理解が誤りであることが明らかとなった。

## 6. 被害感情

被害者及び被害者遺族の感情について述べたものは少ない。<sup>(69)</sup>また、被害弁償や慰謝の措置について触れたものも少ない。<sup>(70)</sup>

これらは、当時、被害者や被害者遺族への関心が低く、被害者に証人として証言させることが少なかったことを推測させる。

## 7. 総括

最高裁において昭和四〇年代に確定した死刑判決を総覧すると、個別の量刑因子のうち、罪責を押し上げる程度が大きいものは、そのほとんどが罪体に関するものであることが分かった。永山事件第一次上告審判決以降と比べると、被告人の主観的事情や被害感情などへの関心は著しく小さく、ほとんど言及されていない判決も見受けられた。

このような状況から考えると、この時期には、事実認定と量刑の関心が相当程度重なり合っていたと言え、量刑のためだけに種々の量刑事実を主張立証させることに裁判所が消極的であったことが窺われる。

個別の量刑因子について分析すると、個々の量刑因子の評価の方向性は、永山事件第一次上告審判決以降と同様である。すなわち、個々の量刑因子について、被告人に有利に斟酌するか、不利に斟酌するかの方方向性に差異はない。

もつとも、(a) 前科に関して、異種又は異傾向の前科についてまで、罪責を比較的大きく押し上げるものとして評価していたことと、(b) 殺害の前提となる強盗などの計画性でさえ、罪責を大きく押し上げるものとして評価していたことは、永山事件第一次上告審判決以降とは異なる特徴的な点である。

前科について見ると、犯罪に手を染めた経験のある者であれば、異種又は異傾向であったとしても、犯罪性が高いために、犯行を拡大することはたやすいと考えられていた節が見受けられる。また、計画性について考えると、殺害の計画まで立てていなくとも、犯罪の計画を立案するような者であれば、いったん犯罪の実行に着手すれば、犯行を拡大することは十分ありうるのであって、殺害の前提となる犯罪の計画ですら、その罪責は相当大きいと考えられていた節がある。この時期には、その科学的根拠はともかくとして、永山事件第一次上告審判決以降よりも、「犯罪者」像がより被告人に不利な形で量刑判断にまで影響していたことが推察される。

これらの昭和四〇年代の状況が昭和五〇年代に入ってどのように変化したのか、そして、どのように永山事件第一次上告審判決に影響を及ぼしたのかについては、最高裁において昭和五〇年代に確定した死刑判決を総覧した上で検討することとしたい。

- (56) 身代金目的のものとして、【1a-40s-1】 最判昭四二年五月二五日、【1a-40s-2】 最判昭四二年一〇月一三日、【1a-40s-3】 最判昭四三年七月二日、【1a-40s-4】 最判昭四六年五月二〇日。保険金目的のものとして、【1b-40s-1】 最判昭四〇年一二月二日、【1b-40s-2】 最判昭四四年一二月六日。
- (57) 【1c-40s-16Li】 最判昭四七年二月二二日。
- (58) 【2d-40s-1】 最判昭四五年一二月一五日、【1e-40s-4】 最判昭四三年七月一六日。
- (59) 【2c-40s-7】 最判昭四五年六月二一日は、強盗の計画性があるに留まる事案であって、財産犯の複数の前科があった

最高裁において昭和四〇年代に確定した死刑判決の動向



事案である。【2c-40s-9】 最判昭四六年一〇月二六日は、計画性のない衝動的な犯行であり、傷害罪の前科があった事案である。【1e-40s-1】 最判昭四〇年一月二二日は、計画性のない強盗強姦殺人の事案であって、強盗致傷の前歴と傷害致死などの前科があった事案である。【1c-40s-1】 最判昭四〇年六月二九日は、計画性のない場当たりの犯行であって、窃盗罪の複数の前科前歴があった事案である。【1c-40s-7】 最判昭四三年五月二日は、強盗について用意周到な計画性の高い事案であって、財産犯を中心とする複数の前科前歴があった事案である。【1d-40s-5】 最判昭四四年一二月五日は、強姦殺人の事案であって、性犯罪の前科があった事案である。【1c-40s-11】 最判昭四四年一二月一六日は、窃盗の目的で住居に侵入した事案であって、財産犯の複数の前科があった事案である。【1d-40s-8】 最判昭四七年七月一八日は、計画性のない強姦殺人の事案であって、強盗強姦罪の前科があった事案である。

(60) 【2x-40s-1】 最判昭四五年九月二二日は警察への通報を恐れた衝動的な犯行であって財産犯を中心とする複数の前科があった事案である。【2e-40s-4】 最判昭四七年一二月八日は愛憎による衝動的な性格を有する犯行であって財産犯の前科があった事案である。【1e-40s-3】 最判昭四〇年九月一七日は、計画性のない衝動的な犯行であって、窃盗罪の前科があった事案である。【1d-40s-4】 最判昭四二年九月二二日は、衝動的とも言える強姦の事案であって、財産犯を中心とする前科前歴があった事案である。【1d-40s-6】 最判昭四五年二月二〇日は、強姦殺人の事案であって、窃盗罪などの前科前歴があった事案である。

(61) 改善可能性、矯正可能性、更生可能性に言及したものととして、盛岡地判昭四〇年八月九日刑資一八九号二二九頁(1c-40s-5) 最判昭四二年七月一四日の第一審)、横浜地判昭四二年四月一三日刑資二一三三三七頁(1f-40s-1J) 最判昭四四年一〇月二日の第一審)、東京高判昭四三年一月一二日刑資二二三三三三頁(1f-40s-1J) 最判昭四四年一〇月二日の第一審)、横浜地判昭四四年三月一八日刑資二二六六四頁(1d-40s-8) 最判昭四七年七月一八日の第一審)、福岡高判昭四五年一二月一二日刑月二卷一二号二二七二頁(1c-40s-17) 最判昭四八年三月二日の控訴審)、仙台地判昭四六年一月二八日刑月三卷一号四九頁(1d-40s-7J) 最判昭四七年六月二七日の第一審)、仙台高判昭四六年八月二日刑資二一六号一三〇頁(1d-40s-7J) 最判昭四七年六月二七日の控訴審)。

(62) 【2c-40s-4】 最判昭四二年九月二九日、【1b-40s-2】 最判昭四四年一二月六日、【1c-40s-12】 最判昭四五年



四月一六日、【1c-40s-13】 最判昭四五年一月二二日、【1c-40s-18】 最判昭四八年九月二七日、【1c-40s-19】  
最判昭四九年一月二〇日。

(63) 従属的な共犯者が無期懲役となった例として、【2c-40s-4】 最判昭四二年九月二九日、【1c-40s-12】 最判昭四五年四月一六日、【1c-40s-18】 最判昭四八年九月二七日、【1c-40s-19】 最判昭四九年一月二〇日。

(64) 被殺者二名の事案として、【2c-40s-11J】 最判昭四一年二月四日、【2c-40s-2】 最判昭四一年五月三十一日、【2c-40s-4】 最判昭四二年九月二九日、【2c-40s-8】 最判昭四五年一月二二日、【2c-40s-10】 最判昭四六年一月二二日。被殺者一名の事案として、【1e-40s-2】 最判昭四〇年七月二〇日、【1c-40s-4】 最判昭四二年四月七日、【1c-40s-5】 最判昭四二年七月一四日、【1c-40s-8】 最判昭四三年一月二三日、【1c-40s-9】 最判昭四四年四月二五日、【1c-40s-10】 最判昭四四年七月二一日、【1x-40s-2J】 最判昭四五年八月二〇日、【1c-40s-13】 最判昭四五年一月二二日、【1d-40s-7J】 最判昭四七年六月二七日、【1c-40s-17】 最判昭四八年三月二日、【1c-40s-19】 最判昭四九年二月二〇日。

(65) 【2c-40s-3】 最判昭四二年七月二五日、【2c-40s-6】 最判昭四四年一月二三日、【2e-40s-3】 最判昭四五年二月一九日、【2c-40s-7】 最判昭四五年六月一一日。

(66) 【1d-40s-1】 最判昭四〇年一月一七日、【1d-40s-2】 最判昭四一年四月八日、【1c-40s-3】 最判昭四二年三月二四日、【1d-40s-3】 最判昭四二年五月二五日、【1d-40s-4】 最判昭四二年九月二三日、【1c-40s-6】 最判昭四三年四月二六日、【1c-40s-7】 最判昭四三年五月二日、【1c-40s-11】 最判昭四四年一月一六日、【1d-40s-6】 最判昭四五年二月二〇日、【1c-40s-12】 最判昭四五年四月一六日、【1c-40s-14】 最判昭四六年二月二三日、【1c-40s-15】 最判昭四六年三月九日。

(67) 【2c-40s-11】 最判昭四七年四月二〇日は、衝動的と評価しうる殺害の計画性のない二件の殺害を実行した被告人に対するものであり、罪責を押し上げたものとして考えられる因子は強姦の他には考え難い。また、【1c-40s-14】 最判昭四六年二月二三日も、衝動的と評価しうる殺害の計画性のない殺害を実行した被告人に対するものであり、同様に罪責を押し上げたのは、強姦以外に考え難い。

(68) 拙著・前掲注(2)二三頁。

最高裁において昭和四〇年代に確定した死刑判決の動向

- (69) 被害感情に言及したものと、【1c-40s-4】 最判昭四二年四月七日、【2e-40s-2】 最判昭四三年五月二日、【1x-40s-2J】 最判昭四五年八月二〇日、【1c-40s-14】 最判昭四六年二月二三日、【1d-40s-7J】 最判昭四七年六月二七日、【1c-40s-19】 最判昭四九年二月二〇日。
- (70) 被害弁償や慰謝の措置に言及したものと、【1c-40s-8】 最判昭四三年二月一三日、【1c-40s-10】 最判昭四四年七月一日、【1c-40s-11】 最判昭四四年二月一六日、【1e-40s-5】 最判昭四五年三月二六日、【1c-40s-14】 最判昭四六年二月二三日。

\* 吉田栄司先生還暦記念号への掲載に当たり、吉田栄司先生の御健勝をお祈り申し上げます。

\* 本研究は、第四〇回（平成二三年度）公益財団法人三菱財団人文科学研究助成「死刑選択基準の変遷に関する総合的研究——裁判員制度の下でのよりよい判断のために——」による研究成果の一部です。記して謝意を表します。

\* 本研究は、平成二三年度関西大学研修員研修費によって行いました。記して謝意を表します。